



近代の画家・天野耕峰が描いた久留米城本丸の画



久留米は全国屈指の城下町だった!!
21万石を誇った11人の藩主たちとは?

久留米城と有馬のお殿さま

福

岡山南の中核市として発展を続ける久留米市。江戸時代は21万石という全国で20番目の石高を誇る城下町でした。その拠点となったのは久留米城。篠山城とも呼ばれ、現在は石垣と堀跡が残り当時を偲ぶことができます。しかし、江戸時代の久留米城は、私たちの想像をはるかに超える巨大なものでした。

失われた久留米城と、久留米を治めた歴代の藩主たちの姿とは、どのようなものだったのでしょうか?

1 久留米城

江戸時代、筑後地域北半部は21万石を誇った久留米藩領でした。治めた藩主は有馬家。兵庫県出身の大名で、豊臣秀吉や徳川家康に仕えました。今から400年前の1621年、丹波福知山(京都府福知山市)の藩主だった有馬豊氏は、幕府から久留米への移封を命じられました。その後、明治維新を迎えるまで、有

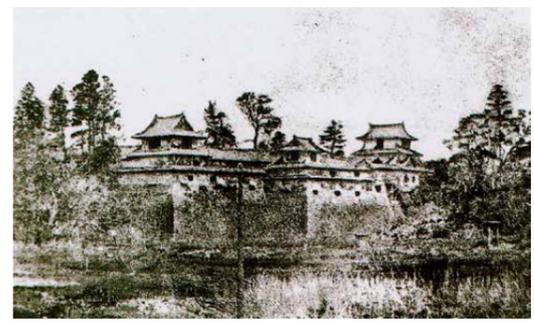
馬家は久留米藩を治め、現代に続く足跡を数多く残しています。

久留米城は、16世紀には原型となる砦が築かれていたと伝わりますが、戦国末期〜江戸初期の小早川・田中家の時代に整備されたと言われます。その後、有馬家の入城に伴い、約70年と言う歳月をかけ、巨大な城と城下町が完成しました。

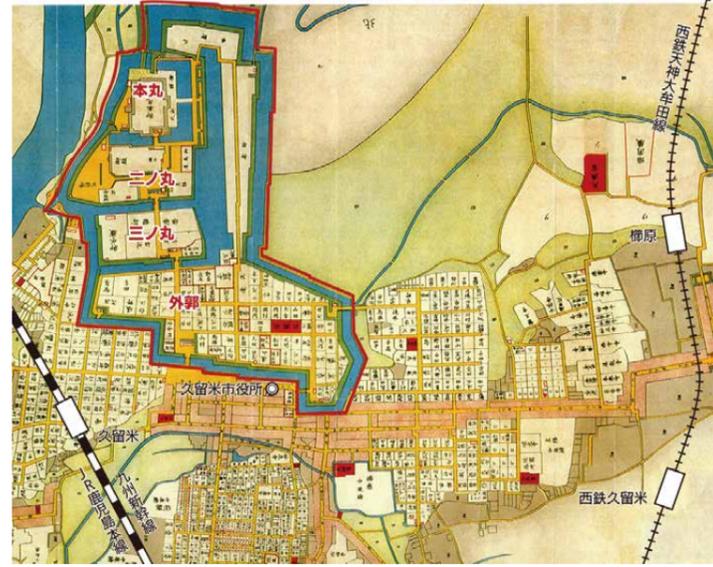
堀や筑後川で防御された本丸は、約15mの高さを誇る石垣と7棟の櫓を結ぶ多門櫓で囲まれ、中央には藩主が政務を行う御殿がありました。本丸の南へ二ノ丸、三ノ丸、そしてこれらを東から南へかけて囲む外郭が広がります。それぞれ堀や土塁によって防御され、城内には藩主や上級家臣の屋敷、藩役所等が広がっていました。戦後の復興で、その面影はほぼ残っていませんが、現在の地図と重ね合わせると、その大きさが分かります。



久留米城本丸全景
筑後川左岸の小高い丘の上に築かれている



明治時代の久留米城



久留米城と現在の地図を重ねたもの。
久留米市役所北側まで広がっており、南北 1.7 km、東西 1.2 km と巨大な城だった

市役所横が久留米城!!
久留米藩を治めた有馬家とは?
久留米城と11人のお殿さまのモノ語りにせまります!

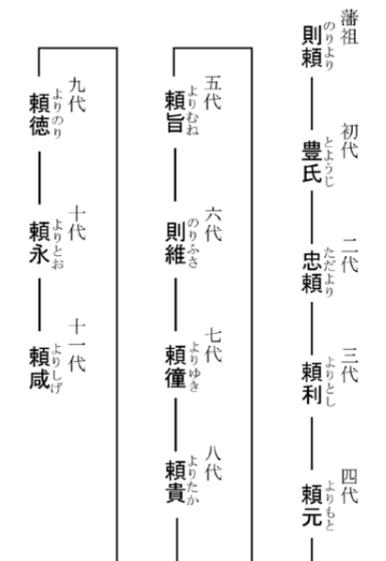
2 久留米藩主・有馬家

久留米藩主有馬家は、室町幕府の要職を務めた赤松家の一族で、兵庫県の有馬温泉付近が発祥と言われています。有馬則頼の時に織田信長臣の羽柴秀吉に仕え、関ヶ原の戦いでは東軍として徳川方で活躍しました。その功績から、子の豊氏とともに大名となりましたが、茶人としても一流であったと言われます。

豊氏は徳川家康の養女・連姫と結婚し、大坂の陣でも功をあげるなど、徳川家から信頼を勝ち取つ



久留米初代藩主・有馬豊氏
茶道を好み、利休十哲にも上げられる



歴代藩主の系図

ていきます。そして、前領主の田中家の改易に伴い、久留米へ加増・転封となりました。当時としては大出世と言えるでしょう。

有馬家が久留米へ転封となった時代、江戸幕府の支配はまだまだ盤石とは言えませんでした。特に江戸から遠く離れた九州には、筑前の黒田家や肥前の鍋島家、薩摩の島津家など、豊臣系の外様大名が多く、江戸幕府にとっては不安が拭えませんでした。

のかもしれない。

豊氏以降、有馬家は明治維新を迎えるまで、11代にわたり藩主として久留米藩を治めました。病気などで短命に終わった藩主もいましたが、歴代の藩主たちは、まちづくりや治水、寺社への寄進、産業振興など、現代の久留米に続く、多くの事績を残しました。次に歴代藩主と現代の久留米の関係を見ていきたいと思います。

3 歴代の藩主と久留米

有馬家による久留米のまちづくりは、1621年の初代豊氏の入封直後から始まりました。田中時代までの久留米城は、東が正面でしたが、南へ改め、連郭式の巨大な城郭へと造り変えました。周囲には侍屋敷や町人が住む城下町、寺町などを配置し、町筋を整備しました。この時の



高良大社の一の鳥居（重要文化財）
承応3年（1654年）、2代忠頼が寄進した

町割りも、現在の久留米市街地の原型となっています。城下町の整備は2代忠頼にも引き継がれます。忠頼は城下町から周囲へ延びる街道を整備し、田主丸町や北野町などに在郷町の振興に注力しました。また、水天宮や日吉神社、北野天満宮へは社殿を寄進しています。3代頼利と4代信頼は、農業振興や

治水事業に取り組みました。大石長野水道や恵利水道を開削し、現在も流域の耕地を潤しています。筑後川には流れを調整する荒籠を造り、治水にも尽力しました。



荒籠と筑後川



恵利堰



久留米藩主を祀る篠山神社
明治12年（1879年）に本丸跡に建立された



朝妻焼

6代則維の時代にも床島用水や小森野荒籠が整備され、農業の振興と治水は、その後の藩主達にも引き継がれていきます。則維は、藩の財政を立て直すために藩政を改革し、収入源として朝妻焼を創業したことも知られます。7代頼徳は54年という長期間の治世中に、寺社への寄進や



柳坂曾根の櫨並木

櫨の栽培を奨励するなど、産業振興に尽力しました。関流和算家としても知られ、学者としての一面もありました。8代頼貴は藩士の育成に力を注ぎ、明善堂（現在の県立明善高等学校）を創設しました。また、この時期に通外町に生まれた井上伝が久留米絃を考案し、その後の久留米の産業振興に大きく貢献していきます。9代頼徳は、歴代藩主の中で最

も風流を好んだ藩主として知られています。茶道では表千家不白流に師事したことから、現在でも久留米は茶道が盛んな地域となっています。10代頼永は、藩の財政を立て直すために尽力し名君と呼ばれました。しかし、病気のため短命で亡くなっています。そして、11代頼咸の時に明治維新を向かえました。約250年間、久留米藩を治めた11人の藩主たち。その足跡が、私たちのまわりのあちこちに、現在も残されています。



令和2年11月1日

◆発行／久留米市教育委員会

◆問合せ／久留米市市民文化部文化財保護課

TEL：0942（30）9322

FAX：0942（30）9714

E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp